

罪ある人々

大鐘稔彦

罪ある人々

大鐘稔彦

## 著者近影



### 略歴

昭和18年3月25日名古屋市に生れる

昭和36年3月愛知県立旭丘高校卒業

昭和43年3月京都大学医学部卒業

現在高島病院外科勤務

個人月刊誌「血と愛」を刊行。

## 罪ある人々

昭和47年3月10日 初版印刷

昭和47年3月15日 初版発行

定価 780円

|     |                      |    |    |    |
|-----|----------------------|----|----|----|
| 著者  | おお                   | がね | なる | ひこ |
|     | 大                    | 鐘  | 稔  | 彦  |
| 発行者 | 石                    | 沢  | 三  | 郎  |
| 発行所 | 株式会社                 | 栄光 | 出版 | 社  |
|     | 東京都品川区東品川1-37-5      |    |    |    |
|     | 電話 東京(471) 1235 (代表) |    |    |    |
|     | 振替 東京 62350          |    |    |    |
|     | 出版社 コーポ 0608         |    |    |    |

印刷 (有)江戸川印刷所

「お客さん、ホラ、あれが」

長い沈黙を破ってヒゲ面の船頭が言った。

「X島です」

目の前に大きく迫った緑の弧形を、それとなく顎で示しながら船頭は続けた。

「有難う。どうも御苦労さんでした」

そう言つて腰を浮かしたのは、見たところ二十七、八の、まだ若々しい青年であつた。濃紺の背広にズボン、淡いグレイのネクタイ、そして右手に黒鞆といういでたちは、その大きく見開いた目、やや面長な顔の中央にくつきりと輪郭を描いた隆い鼻、小さ目だがしつつかと結び合わされた口もと、そして、中肉の、どちらかと言えば筋肉質な身体つきとよくマッチして、一つの個性的な雰囲気をかもし出してゐた。

程なく船は、島の入江にゆるゆると入つて行き、やがて、棧橋にピタリと横づけになつた。

「どうも御苦労様」

青年はもう一度礼を述べると、ゆらゆらと小刻みに揺れる船から、意外に身軽な動作でヒョイと棧橋に降り立

つた。

「当麻先生ですね。お待ちしております」

と、こう声をかけたのは、一見してそれと判る事務員風の男であつた。

「どうぞこちらへ。先程から園長がお待ちかねです」

促されるままに青年は、案内者の後に従つてトボトボと歩き出した。

道はかなりの勾配であつた。先刻までの雨に、土はまだしつとりと湿り気を帯び、漸く緑を増して来た木々の葉は、惜しみなく降り注ぐ陽光を浴びて頻りに瞬いてゐる。

（どこもかも春だ！）

物珍し気に四方の景色を見やりながら、青年は人知れずこうつぶやいた。

「ここです。こちらへどうぞ」

案内人の声が、彼のささやかな幸福を破つた。木造の、二階造りの建物がいつの間にか目の前に立ちはだかつていた。

「お荷物をお預り致しましょう」

右手の黒鞆にツツと手をやって事務員が言った。

「いや……結構です」

青年は咄嗟に相手を制した。

「邪魔にもなりませんから」

男は素直に手を引いて、そのまま案内を続けた。

通されたのは、二階であつた。最初の部屋に「園長室」と記してある。

「オヤッ？ 園長は……？」

入口に差し掛つたところで、不意に事務員がかん高い声をあげた。

「園長先生は、今ちょっと出掛けておられます」

若い女の声が返つて来た。

「すぐお戻りになると思いますが……」

声と共に、これも一見して事務員風の女が隣の部屋から姿を現わした。

「今度いらして下さった当麻先生だ」

案内の男が、背後の青年を振り返りながら言った。こちらは反射的に腰を屈めた。

「始めまして」

「いらつしやいませ……」

女はポツと頬を赤く染め、些か戸惑つた様子で青年を下から見上げた。が、すぐに相好を崩して続けた。

「ようこそ、先生、皆さんお待ちかねですよ」

そうして青年を園長室へ誘つた。

テーブルを挟んで、長いソファアが二つ置かれてあ

る。窓は南向きらしく、部屋は豊かな光を受けて十分に明かるかった。壁に何やら地図のようなものが貼つてある。島の見取図だな、と青年は察した。

「じゃあ、先生、ごゆっくりくつろいで下さい」

客がソファアに腰を下すのを見届けてから、最初の案内人が言った。

「園長先生にお電話かけますわ」

と、それへ女事務員がつけ足して、テーブルの受話器に手を伸ばした。その間に、男の方は素早く部屋から姿を消した。

「すぐいらつしやるそうですから」

受話器を戻して愛想よく言うのと、彼女もまた部屋を出て行つた。が、五分とたたない内に戻つて来て、若い客人の前に紅茶を差し出した。そして、どうぞ、と小さく一言いうと、足早に立ち去つた。

その後姿がドアの背後に消えるのを見届けてから、青年は大きく深呼吸した。続いて二度、三度……その度に熱い息が吐き出された。肩が硬張り、顔が些かほてっているのを彼は感じた。それは彼にちよつと忌々しい気持ちをもたらした。

窓の向こうには、相変らず春がその営みを續けている。青年はそれに気付いた。彼はチラッと腕時計に目を

やり、女事務員が受話器を切ってから丁度五分たったのを確かめると、やおらソファから腰を上げて窓辺に足を運んだ。

外には物憂い倦怠感が漂っていた。青年の鋭敏な感性は素早くそれを感じ取った。彼はまた一つ深呼吸した。それから、アチコチに目を転じ始めた。まず、空を見た。白っぽく、青味がかった早春の空が、緑の木々を柔らかに包んでいた。風はそよとも吹かず、木立は不動の姿勢で天空にそびえ立っている。その木立の間を縫って、黄土色の細い道が遙か彼方に延びている。

(あれは何処に通じていたっけ?)

軽い好奇心を覚えながら青年は自問した。次いで彼はずつと左手、下方を見下した。そこにはつい今し方辿って来たばかりの道が、長い尾を引いて入江にまで達しているのが見渡せた。

入江——その緑は、島に寸分の間隙もなく食い込んで、空の青、そして地の黄と三つどもえをなしている。そこまで視線を延ばした時、彼は不意に(オヤッ!)と目を見張った。船から島を眺めた時にはまるで気付かなかったものをそこに見出したように思ったからである。

それは、入江に沿って立ち並んだ、幾棟かの平屋建の家屋であった。彼は懸命に記憶の糸を辿ったが、想い出

すのにさして長い時間はかからなかった。やがて彼の脳裏には、八年前の夏の日のことが次々と出沒し始めた。

(だが、あの時とはちょっと様子が違う)

その一角に視線を凝らしたまま青年はひとりごちた。(少くとも、右手にあるあの棟はなかったはずだ。それとも、あの時は気が付かなかったのだろうか? 新築したようにも見えないし……)

ものの一分間そんな自問自答を続けていたが、やがて彼はアッサリと、結論を下すのを諦めた。新たな想い出が胸につき上げて来たからである。そしてそれは、必然彼の目を大地から引離し、更に右手の方、より高く、より遠い天の一隅へと誘った。

そこには段々島が広く、豊かにうねっていた。だが彼の目はもつと上の方、天に近い所に吸いつけられた。

くすんだ灰色の建物が、追憶の中から鮮やかに蘇って来た。丘の上にボツンと現われたそのイメージは、八年前のそれと少しも変わっていないかった。

(あの人は、まだいるだろうか? アレは……何という名前の人だったかな……確か……)

喉もとまで出掛つていながら、記憶に蘇って来ない一人の人の名を彼は暗中模索し続けた。それは、その灰色の建物と切離し得ない一つの鮮明な像であった。若い、

小柄な、やや褐色がかった髪と、美しいとまでは言えないが小造りな愛らしい顔、そして身には白のブラウスと水色のスカートをつけた、一人のたおやかな女性のイメージであつた。

(不思議だ！ すっかり忘れてしまつている！)

どうしてもその名を想い起せない苛立たしさに熱くなりながら、青年は歲月がもたらした忘却の執拗さにチツと舌を鳴らした。決して幸福とは言えなかつた青春の、ほんの一時をその人は彩つてくれた。遠く、海原を隔てた異郷の地に彼女の存在を見出した時、彼は、驚き、狂喜し、そして、悩んだ。その人は、彼の内に無いものの、彼がひたすら求めてやまないものを既に持つてゐる——と、少くとも彼にはそう思われたからである。満たされぬ内心の空しさに耐えかねて一刻も早く去りたいと念じた島が、唯彼女一人の存在の故に何故か妙に立ち去り難いものと変じた。出来れば彼は、彼女と膝を交えて語り合いたかつた。しかし、結局は一言二言、それもほんの挨拶を交しただけで別れてしまつた。

帰つた後は暫く憂鬱な日々が続いた。吐き出すべきものを吐き出し得なかつたような、何とも未練がましい思いにさいなまれた。しかし、そうした苦しみも、やがて訪れた新しい出来事に心を奪われて次第に薄らいで行

き、遂には全く忘却の彼方に消え失せてしまつた。そして、それつ切り、彼は彼女の事を二度と想い出すことがなかつた。

(もし、今も尚いるとしたら——)

と、彼は、その人の名を想い起そうとする努力の徒勞なことを悟つて、別なことに想いを馳せた。

(自分がここへ来ることも聞いているに違いない。と、すると、一体どう思つてゐるだろう……。自分のことを、果して彼女は覚えていてくれるだろうか……?)

こんな風に想いを巡らしながら、いつしか彼の眼前には、あの日、あの時、あの灼熱のまばゆい白日の下で見え、語り、行きずりに会釈を交した島の人々の幾つかの顔が髣髴と出没し始めていた。一瞬、彼の胸に熱いものの、郷愁にも似た懐かしさがつき上げた。それは彼に新しい緊張をもたらし、彼が今立つてゐる場を深く認識させ、そして、熱い独白を吐かせた。

(そうだ！ 到頭来た！ もう来てしまつたのだ！ 今更どうしようもない。いや、今からすべてが始まるのだ)

多少分裂した、内心のこうした囁きに我を忘れる余り、その時背後に人影が迫つてゐるのにも彼は気付かなかつた。

## 二

「やあ、どうもどうも。すっかりお待ちせしました」

静寂をついて不意に耳許に響いた明かるい、だが幾らか鼻にかかった声に驚いて青年はクルリと窓に背を向けた。刹那、覚えのある四角な顔、上背はさしてないが七十キロは優に越すであろうと思われる巨体が視野に飛び込んだ。

「園長の光本です」

とやはり鼻にかかつてはいるがいかにも快活な声が続いた。春ののどけさは一瞬の間に破られた。同時に青年の脳裏を去来していた幻も何処へともなくかき消えた。

「ハア……」

と彼は些かシドロモドロになりながら答えた。粘っこい生唾が妙に口の中でベトついた。それをゴクンと一呑みしてから、やっと声らしい声を絞り出した。

「当麻です」

「始めまして」とつけ足そうとして彼は慌てて口を閉じた。固より初めての邂逅ではなく、束の間ではあったがその昔相見え、暫しの語らいを共にしたことにハタと思ひ到ったからである。だが相手はどうやらそうではない

らしかった。深々とソファに腰を埋めると、満面に微笑をたたえながら、いきなり園長はこう言った。

「あなたとは、確か初めてお目にかかりますな」

「いえ……」

と促されるまま腰を落着けるなり、こちらは急いで打消した。

「以前に一度、学生時代、夏の休暇に寄せて戴いたことがあります」

「夏の……？」

と園長は鵲返しに聞き返してから、いかにも記憶の糸をたぐるかのように上目使いに天井を見やった。

「想い出せませんな。いやあ、そうですか、……それはウツカリしてました。年をとると、どうも物忘れがひどくなつていかんです」

弁解ともとれるこの言葉は、しかし、一面真実な告白とも青年には思われた。事実、彼が八年前に初めて見た園長は、二度目の邂逅の瞬間彼の注意をひいた頭の白いものも、額や顔に点在するシミも、また、首筋の皮膚のたるみもない、張り切つてツヤツヤとし、自信に満ちた中年の紳士であった。その時光本殿は五十一歳であったが、若い訪問者の目には四十五、六と写った。だが、今はどう見ても年相応に、或いはより老けて見えた。

「ここ一、二年糖尿病を患いましてね」

とややあつて園長は続けた。

「どうも身体がダルくていかんです。アレは何とも厄介な病気ですなア」

「ハア」

返事の積りもなく青年は小さく洩らした。糖尿病の幾つかの病状が彼の頭に浮かび上った。

「ところで」

と園長はまたすぐに口調を変えて言った。

「いや、それならば先生、島の勝手は御承知戴いてる訳ですな」

「ええ……まあ……大体覚えてる積りですが……」

「それは好都合です。何でしたら御一緒にザッと御案内させて戴いてもよいのですが……」

「いえそれには及びません。後程ゆっくり見て回りますし」

「そうですか。じゃ、それはそうして戴くとして——取り敢えず官舎の方へ御案内——いや、その前に二、三、予め心しておいて戴きたいことがありますな」

終りの方は独白の口調でこう言うと、園長はやおら上体を前に乗り出し、秘密でも洩らすかのように、急に声を落して続けた。

「既に御承知と思いますが、この住人の大部分は、私共医者と看護婦、事務系の職員、それに患者で占められています。しかし、何処の世界でも同じですが、特にこうした特殊な環境の中では人間関係がなかなか微妙でしてね、お互いの間、必ずしもしつくりと行っていないのが実状です。患者が四、五人集まればまず決つて医者の粗探しに話の花が咲くとさえ我々は思っています。事実、そうした中傷を頻々と伝え聞いて、当初はこの島に骨を埋める覚悟で来て下さった篤志な方々が既に幾人か、赴任されて間もなくやめて行かれましたね。我々がどんなに引き止めたか思つても、おかしいもので、そんな時にはご当人の気持がすっかり硬化してしまつてゐるのですな。中には、私に散々鬱憤をぶちまけ、憎々し気に捨台詞を残して去つて行つた人もありますよ。黙つて出て行かれる方もありました、そんな人達は一樣に、何かで培われた理想と夢を抱いて島にやつて来ながら、それらが無残に破られてどう仕様もない幻滅の悲哀を覚えたんです。理想や夢では突破出来ない何者かがここにはあるようです。その証拠に、若くして、しかも大抵は周囲や肉親の猛烈な反対を敢えて振り切つてまで、敢然とこの島へ来て下さつた医者なり看護婦さんの、まず半分以上が、五年以内に島を去つて行かれましたよ。我

々としては何とも辛いことですが、しかし、否むことの出来ない事実です。要するに、彼らには夢が多くあり過ぎたのですな。若い情熱、理想——それ自体は何ら咎むべきではない、否、寧ろ尊敬に値するものですが——とに角、そういったものに燃える人達には自分達の生活のことなど余り問題ではない、それよりも自分達が描き抱いている理想の姿を目の辺りに見、或いはそれを実現することに最大の関心がある訳で、少しでもそうしたものにブレーキがかかるような事実に出遇わすと忽ち悩んでしまう。要するに、彼らはこの世界を幻想の中で美化し、彼らのイメージの実現と共にそれはたとえようもなく美しいものへと飛躍する、と固く信じ込んでいた訳です。だが、現実という奴はいつでも理想を覆します。美しいどころか、醜く、汚らしいものに満ち満ちているのが真相ですよ。一カ月も住んでごらんになればおぼろ気にも判つて来ます。その意味で、私はあなたのような、若く、才能に富み、前途有望な少壮気鋭の医師をお迎え出来たことを心から喜ぶ半面、どうかここを特別な所、まかり間違つても美しい地だなどとは思つて戴きたくない。それどころか、人間のあらゆる醜さが最も典型的な形で充溢した、所詮は罪人の島だとわきまえておいて戴きたい、そうして、願わくば、あなたの若さとエネルギー

ーで以つて、その汚なさにメスをふるつて戴きたい——とまあ、こんな風に望む次第です」

長舌を終えて園長は愉快そうに笑つた。この間青年は、時に頷き、時に訝り、時にムツとしたような表情を作つて顔を緊張させながら無言のまま聞き入つていた。キメの細かい色白な彼の額に、時に朱色がサツと掠め走つたりもした。また、時には何やら言いたげに唇がピクピクッと震えたが、しかし、そこから言葉が洩れ出ることはなかった。寧ろそれは、彼の内部に起つたかすかな興奮の余韻であり、それを彼は懸命に押し殺そうとした、その結果とも見えた。もしこの時一言でも彼の唇から言葉が発せられたとしたら、それは恐らく小刻みな震えを帯びていたに違いない。

「いや、どうも」

と園長は、相手の沈黙に些か戸惑つた様子で言つた。

「お出で下さつた早々教訓めいたことを申し上げて……お気を損じられたらお許し下さい」

「いえ、別に」

と漸く青年は軽い微笑を返しながら口を開いた。

「気を損じるところか、実に有益なお話と感謝しています。一つ一つ肝に銘じて、私は私で出来る限りのことをなしたいと思っています。御期待に沿ひ得るか否かは甚

だ心もとないのですが」

「いやいや。その点は少しも心配しておりません。大学に居られればゆくゆくは教授ともなられる方ですのに、わざわざこんな島へお出で戴いたことに對し、何とお礼申し上げたらよいか分らぬ程なのです。いや、もつと露骨に言わせて戴きますなら、あなたのような若い医者をお迎え出来、我々としては些か点数を稼いだ訳です。ハッハ。と申しますのはつまり、ここ数年ちよくちよく、島の医師の老齡化が患者側の不満として耳に入つて来ましてね。要するに何ですな、年取つた医者 of 隠居仕事みたいに思う訳ですよ。それに、私自身もこの年になつて我が身を振返りつつ痛感することですが、老人というのはどうしても一徹ですからな、自分がこうと思ひ込んだ療法は、患者が何と言おうと変えない、といった医者が往々ありましてね。つい昨年やめられた或る内科の先生は、——女の方でしたが——、栄養學を何十年と勉強されてすっかり食事療法の信奉者となり、それをここでも鼓吹し始めたんですな。ところで、患者にしてみれば、境遇が境遇だけに、食べることで人生のたった一つの楽しみという者があまたいる訳です。それを、やれ何を食べてはいかん、何を食べるから病氣が騒ぐ、と逐一事細かにうるさく注意され、束縛され出したのだからや

り切れません。到頭不満が爆発して、彼らは断乎抗議を申し入れましたよ。全体からすればそれでもほんの一部の者達ですがね。しかし、それから一月もたたぬ間に、その先生、辞表を提出されました。普段はにこやかな方で、私共も氣安くお付き合ひをして戴いたのですが、人間という者は変れば変わるものですなあ、その時は別人のように頑な態度を示され、私と医部長が渾身お引き止めたんですが、もうとりつくしまがありませんでした。流石に後味の惡さを覚えましてね。これなどはいわば、患者の食欲に医者 of 善意が踏みにじられた笑うに笑えぬ悲喜劇でしょうなあ。しかし、その先生ももう少し折れて、患者の氣持を汲み取り、その要求にあつた治療法を併用して下さつたら、事は案外簡單無事に済んだのでしようが——それが老いの一徹という奴でしようなあ。五十代も半ばの方でしたが……一面には、女だと思つて患者が馬鹿にしている、という風に思ひ込んでしまわれたようですな。いずれにしてもお氣の毒なことをしました。聞くところによると、どうもそれつきり医者をやめ、田舎に引込んでおられる御様子ですがね……」

ここで園長光本殿は語尾を濁し、若い面接者の顔色をそれとなく窺つた。が、そこにありありと興味の色を見届けたので、またすぐに続けた。

「これも内輪の話になりますが、我々にとって不都合でもあり遺憾とも思われることは、その事件を契機に、それまで比較的従順で受身の立場にあった患者が、何かにつけて文句を言うようになったことです。自分達の圧力によって一人の医者を追い出したという事実が、どうやら彼らの過信を招いてしまったようです。お蔭で、私も何かにつけて仕事がいや辛くなりましたね。まあ、患者との摩擦なしに極くスムーズに事が運ぶということは稀と言っているすなわち、もっとも、悪いのは患者の側ばかりではありません。彼らの信用を勝ち得て面倒を起さないだけの何ものかが我々医者の側にも欠けているのでしょうか、ハッハ」

最後は真面目とも冗談ともつかぬ顔であった。しかし、聞き手に終始している青年の表情は硬く、多少うつ向き加減になった額には、一筋、二筋、それとなく暗い影が漂っている。つい先刻までひしと相手に注がれていた眼差しも、いつの間にか足下に落ちていた。

「どうかされましたか？」

余りに長い相手の沈黙に更に戸惑った恰好で光本殿は青年の顔を覗き込んだ。

「どうやら話題を変えた方がよさそうですね。ご着任早々、旅装もまだ解かれないうあなたにこんな内輪話は甚だ

不愉快だったかも知れません。不徳の点はお許し下さい。それと言うのも、実はあなたにお目に掛った瞬間、あなたが普通の方とは違う、ここへ来られたのには何か余程の理由がありになる。勝手な推察を許して戴くならば、非常に美しく、尊いお心から出たことである。少くとも、生活の場を求めて——、といったものではないことを直感し得たからです。失礼ですが、当麻先生、あなたは、何か信仰をお持ちですか」

「いえ、何も」  
と青年はだしぬけの質問にちよつとたじろぎながら答えた。

「私にとって、人間以上の者はこの世に存在しません。無神論者と言うのでは決してありませんが」

「それは結構です。いや、実は、これまでに幾人か、その大部分は女の方でしたが、カソリックの医者や看護婦が赴任されましてね。当初は熱烈なヒューマニズムを掲げて献身的に奉仕して下さるのですが、どういふものか長続きしないんですなあ。一人減り、二人減りして、今では皆無と言っている程になりました。そうした例を古くから見えておられる医部長の森川先生などもよく仰言るのですよ。結局は我々のように、生活の為に来ている者が一番強いんですね、ハッハ。いや、しかし、中に

は例外もあります。眼科の南条先生は——御存知ですか——、私とほぼ同じ時代に島へ来られて、いわばこの主みたいな方ですが、この先生はカソリックでなくプロテスタントの信徒で、この教会で時に牧師の代りに説教もなさるという方ですがね、この人はまあなかなかの人物です。若い時に随分辛酸をなめられたようで、人生の裏も表も知り尽し、達観したそのお姿には、さながら聖者の感がありますなあ。この方の前なんかに出ると、私などは己の俗っぽさが厭という程痛感されて、ハッハ。どうにも面目ない次第です。ま、いろいろありますよ。ここもまた所詮は社会の縮図ですな。様々な人間がおります。しかしまあ、どうかお心を寛大にして戴き、円満にやって戴ければと願います。もつとも、不備な点に気が付かれましたら、その時は遠慮なくドシドシ仰言って下さればよいのですが」

「有難うございます」

青年は低くつぶやくように言った。

「私も一度ここへ参らせて戴いたからには、微力を尽して頑張りたいと思っています。暫くは勝手も要領も分りませんので何かにつけてお手数をおかけすることと存じます」

「いやいや、その点は何らお気を使われる必要はありません」

せん。これまで大学でなさって来られた通りにして戴けばよいですよ。但し」

と急に園長は声を落し、大柄な上体をグイと相手の方へ乗り出した。

「こんなことを申し上げるのも何ですが、明日からでも早速治療を始めて戴かねばなりませんので、予めこれだけは心に留めて置いて戴きたく思つて申し述べる次第です。どうか、余り患者を甘やかさないようにして下さい。中には、薬について勝手な注文をつけてくる者もいると思いますが、そこは適当に受け流して下さいと思います。こんなことは因より先生の方が詳しいかも知れませんが、何分厚生省の予算も限られておりましてね、ウツカリ患者の言いなりになっておろうものなら、忽ち破産してしまいますからなあ。化学科の治療を隔日にしておるのも、つまりは予算の関係上なのです。どうか、その点だけは大学と違うと思いますので、宜しく御了承下さつて、なまじ患者の訴えに同情されないようお願い致します。こういうことはいつも始めが肝心ですね。最初に、この先生は甘いと見透かされると、以後の治療に何かと不都合を生じて来るものです。患者の方が主権を握ってしまいますからナ。中には悪どいのが居ますよ。ここからでこでも出て行く気のない患者などは、

本病の治療には全く無関心で、やれ胃が悪いの、やれ身体がだるいのと言って専らそちらの薬だけを要求して来ますからな、一々その言い分を聞いていたら途端にこちらを嘗めてかかりますよ。そういう連中には容赦なく厳しい態度で接して戴くことですね。それが結局は当人の為にもなることだと思ふのです。要するに我々の任務は、病にかこつけての怠け者を作らないようにすることですよ。なかなか一朝一夕にはいかんことですがね、ハッハ」

先本殿はまたもや巨体をゆすって笑い飛ばした。どうやらこれは長年に亘る癖のようである。

その時廊下に足音が響いて、戸口に先程の女事務員が姿を現わした。彼女は黙礼してツカツカッと歩み寄ると、テーブルの上に何やら書類めいたものを差し出し、またすぐに引返した。

「そうそう、ところで当麻先生」

と園長は目の前に置かれたものを手許に引寄せて言った。

「饒舌はさておいて、取り敢えず二、三の手続きをお願いしましょうか……お気に召すかどうか分りませんが、これから早速官舎の方に行つて戴いて、この書類に目を通して戴き、必要な所に捺印、御署名下されば宜しいの

ですが……印鑑は、お持ちですね」

「ええ、持っております」

ちよつとためらつてから、想い出したように青年は言つた。

「それでは官舎の方へ御案内致しましょう。それから先生、今夜は有志の者でささやかながら歓迎会をさせて戴く用意をしておりますので……なに、ほんの顔つなぎですよ。こんな所ですから、どうせ大したおもてなしは出来っこありません。お喋りに終始することと思ひますが、しかしまあ、どんな人間がここに住んでいるか、それをザッと知つて戴くだけでもよいと思ひますので」

### 三

二時間後、早春の黄昏は既に島を淡い陰影で包み始めていたが、当麻鉄彦はブラリと官舎を出た。身体より先に着いていた荷物の整理、配置、それに長路の旅などで疲労が積み重っているはずであつたが、不思議に彼は緊張を覚えていた。

点在する官舎を縫つて、海を見下す細い島の道を通りながら、若い医者 of 脳裏には様々な思いがよぎつていた。たゆとう海、そこに浮かぶ、恐らくは無人にも近い

であらう人知れぬ遙かなる島々を眺めやった時、彼はまず、自分が果てしなく遠い所にやって来たことを痛感した。それは彼の心を、一種物悲しいノスタルジアへと誘った。つい先刻まで全く忘れ去っていた幾つかのイメージが髣々と幻に浮かんで来た。

彼は父母のことを想い出した。六十も半ばに達した父と、六十に間近い母親のことを。父親は最後まで息子の新しき志に反対した。彼にとつて、青年の計画は余りにも無謀であり、赴かんとするその所は、余りにも未知で遠い異郷の地に思われたのだった。

「よりによって」

と父親は、息子から決意の程を告げられた時、忽ち悲嘆に暮れて言った。

「何故お前がそんな所へ行かねばならないんだ。大学での研究生活——そこに何の不满がある？ 漸く落着いて、さてこれからだと、私も母さんも楽しみにしていたのに……いや、お前自身がそう言っていたのに……何故急にそんな突拍子もないことを思いついたのだ？ 何処から、誰から、そんな考えを吹き込まれたのだ？」

「何処からも、また、誰からも吹き込まれやしません」すっきり取乱した父の姿に自らも胸を痛めながら、しかし断乎として青年は答えた。

「机の上の学問、研究——決して嫌いではないが、そこに僕は絶えず或る種の空しさを覚えていました。僕には、人間を相手としない仕事は悉く、つまらない無意味なものと思えないのです。今度のことも、気まぐれに思い付いたものではありません。実はもう何年か前に、今日の日のあることを予想していました。それを言い出さなかったのは、一つには、医者としても、まだまだ未熟であったから寝言ぐらいにしか受取られないだろうと思ったためです。そして今一つは、徒らに周囲を騒がす必要はないと考えたからです。要するに、医者として一人前になるまでは何も言うまい、それまでは、どんなに空しくとも、辛くとも、勉強に励もう、とこう心に言い聞かせたのです。しかし、今やその時が来ました。最後の決意に到るまでにはそれでも流石に思い悩みましたが、昨夜キツパリと心が決まりました。もはや何と言われても決心は変わりません。許して戴くより仕方がないのです。お父さんがそんなに悲しむのを見るのは辛いですが、しかし、辛いと言えば僕も同じです。何もお父さんが憎いから離れるんじゃない——それだったら僕も苦しむ必要はないでしょう——、そうじゃなくて、これはもう僕自身の心の問題なのだからどう仕様もないんです。お父さん、どうか判って欲しい」

父親は唇をかんで無言のまま席を立つと、それっきり寢床に引込んでしまった。そして、いよいよ出発というその日まで、故意に息子との接触を避けていた。

一方、母親の方はもう少し寛大であった。彼女は敢えて——夫の心を思うばかりに——口にしなかったが、内心では息子の決意を誇らしく思っていた。彼女は彼がまだ幼い時から一つの夢を子供に託して来たのである。息子が一筋に医学の道へ進むのを見届けるや、彼女のそうした夢はいよいよ大きくふくれ上って行つた。その脳裏には、密林の聖者と謳われたS博士のイメージが一貫して強くこびりついていたのだつた。

それ故に彼女は、息子と夫との間に挟まって苦しい立場におかされた。息子から意見を求められると、彼女はオロオロし、そつと夫の方を流し見やりながら、

「それはあんた自身の問題なのだから……あんたがよく考えた上でそう決心したのなら、お母さんとしては何とも言えないよ」

と答えるのだが、父親はそんな妻に腹を立て、子供と母親と寄つてたかつて自分を苦しめる、と嘆くのだつた。

かくて出発前の一、二カ月間というものの、当麻家には何とも気まずい空気が漂いわだかまり続けた。青年はこ

の時程、家族がバラバラであり、夫々が孤独であるとの思いに胸の痛んだことはなかった。彼は家庭に憩いを見出せない自分を発見してフト言い知れぬ寂しさに襲われた。同時に、説明のつかぬ腹立たしさも覚えた。そうした感情は、父母の元を去って遙かなる異郷の島に赴かんとする彼の情熱に拍車をかけ、最後の迷いを打消した。そして彼は逃げるようにして故郷を後にした……。

あてもなく島の道を散策しながら、青年は我知らず望郷の念に咽んでいた。勝ち誇つたような気持と、それは裏腹な後悔にも似た思いが頻りに彼の心を掠めた。

(だが、どう仕様もなかったのだ)

と彼は自らの心に言い聞かせた。

(自分は父が憎くてあんな態度に出たんじゃない。憎むどころか、自分は父を愛している。愛すればこそ苦しんだのだ。そうとも！ 自分は父を愛している。分らずやあの父を！ ああ、どんなにか愛していることだろう！)

不思議に母親の面影は乏しかった。何か言いたそうでもしか何も言わず、眼鏡の奥で遠慮深気にじつと自分を見詰めている父の目を彼は感じた。そこはかとなく懐しさが、悲しみと切なさを伴つて、胸に痛く突き上げて来た。

この間にも彼の足はざっと百メートル程だらだら坂を下っていた。と、突如、視野が開けた。気が付くと、目の前に入江が迫っている。そして、視野の斜め右方に、折しも二つの人影が現われた。それは忽ちに彼の注意を奪い、ほんの今までその心を占め尽していた物悲しいノスタルジア、父への追憶を消し去ってしまった。

初老の女と、壮年、或いは中年かも知れない男が今しも、その場に釘付けになった青年の前方十数メートルの所を横切ろうとしていた。男は女の手を引き、女はもう一方の手に杖を持っている。二人共ぎこちない足取りである。薄ぼんやりした黄昏の色彩の中にも、その女の目が白くムキ出し、髪は半ば抜け、鼻が欠けた顔は一面ロウを流したかのような様相を呈していること、そして一方男の方も、顔は同じように醜く損われているが、唯目だけはどうかやう自由に活き働いていること、等を青年は素早く見てとった。端目には、息子が盲目の母親を手引きしている様に写ったであろう。だが、彼は知っていた。二人は夫婦であり、しかも、この島において結ばれた間柄であるということ。そして恐らく、女の方には嘗て島の外に別な夫、健康で、打算的で、愛情の乏しい夫がいたであろうし、男の方にも、若く、はつらつとし、五体健全な妻があつたであろうということも……。

いかにも奇異な感じのするこの一組の男女は、固唾を呑んでその動向を見詰める青年と同じく、どうやら春の黄昏に誘われて入江まで散策に出向いたらしかった。ぎこちないながらも男の足取りはトットトットと大股で勢いよく、女の方はそれに引きずられるようにして懸命に歩を運んでいる。

二人がこちらを振向くものと思つて身構えていた青年のアテは完全に外された。気が付かなかつたのなら仕方がない。しかし、気付きながら故意に知らぬ振りをしたとしたら……と考へて、彼は急に熱くなった。心の片隅に、漠とした影がさすのを覺えた。

彼は瞬時二人の跡を追おうかと思つた。少くともこのままでは氣持が収まらないやうな氣がした。彼は秘かに期待していたのだ。男はきつとこちらを振向くだろう。初めて見る自分に戸惑うかも知れない。だが、その時すかさずこちらはニッコリと会釈するのだ。丁寧に、親しみに、しかし、あくまで医者たる權威を失わず……すると向こうも自分の何者なるかを悟つて、一瞬驚き、一瞬たじろぎ、そして次の瞬間には、忽ちにして信頼の念を抱きつつ大きな会釈を返すことだろう。かくて我々の間には早くも友情が生じ、我が島における生活は勝利を以て始まる——等々。